

書名：レインツリーの国

著者：有川浩

出版社：新潮社

出版年月：2006年9月

総ページ数：203ページ

ISBN：9784103018711



推薦者

紙谷洋丞

鳴門教育大学事務職員

読書が好き！という方でも、好きな本のジャンルは様々と思います。私が読むのはもっぱら小説なのですが、今回は私が最近読んだ小説の中から、読んでいてにやにやしてしまうような、ちょっと恥ずかしくなるような、そんな恋愛小説を紹介してみたいと思います。

この小説は、とある一冊の本をきっかけにインターネット上で知り合った男女が、その本についてメールで話をするうちに盛り上がりつつ・・・といういかにも現代的な出会いが発端のお話です。物語序盤からは甘ったるい内容になるかと思わされますが、実は二人はそれぞれが重い事情を抱えており、その後の展開に影を落としていきます。オープニングからエンドロールまでお話したいところですが、ここではネタバレにならない程度にあらすじを紹介します。

主人公である「伸」はメール相手であるヒロインの「ひとみ」とネット上でやりとりをするうちに実際に会いたくなり、会おうと提案します。しかし「ひとみ」はなかなか会うことを承知してくれません。会いたいのは自分だけだったのかと落胆する「伸」ですが、実は「ひとみ」にはある障害があり、それが原因で彼女が会うことを躊躇していたことが明らかになっていきます。「ひとみ」を気遣いながら少しずつ距離を縮めていこうとする「伸」ですが、健常者である「伸」の気遣いは、「ひとみ」にとって十分でなかったり、時に的外れであったりします。互いに惹かれ合いながらも、自分と同じ障害を待たない他人に、本当の意味で自分の苦しみが分かるはずがないと考えている「ひとみ」と、分からないなりに努力して、なんとか相手を理解しようとする「伸」の姿が印象的です。しかし、会うたびに小さなケンカが積み重なるようになり、ある事件をきっかけに「伸」はどうとう「ひとみ」を突き放してしまいます。そしてそのときに、「伸」は自分の身に起きた過去の不幸を語り、自分が「ひとみ」の障害を本当の意味でわかってあげられないように「ひとみ」もまた「伸」の不幸を本当の意味で理解できはしないと告げます。

ひとくちに障害といっても人それぞれで、同じ障害のようでも様々な分類があります。この作品は、単に障害者と健常者という二通りの立場だけで線を引くことの危うさを伝えようとしているように思います。また、障害を持つゆえに「ひとみ」が職場で感じている苦しみや引け目がリアルに描かれており、障害を持つ人が抱える生きづらさについて考えさせられます。

なんだか暗い話のような紹介になってしまいましたが、そこは売れっ子作家の有川浩さんの小説らしく、パソコン上での二人の話し言葉でのやりとりや「伸」の軽快な関西弁に引き込まれて、テンポ良く楽しく、たまにベタ甘に読ませてくれます。「伸」と「ひとみ」のその後が気になる、おすすめの一冊です。

